

（黒い予兆）



朝、前日が日曜日だというのに、コロナ渦と気候変動由来とおぼしき突然の強大寒波で激減してしまった「悲しき売上」の整理を終え、自転車でお店から帰宅する途中、どこにいるかは分らなかったのですが、一羽のカラスが、やたらと大きな声で「カーカー」鳴くので、何事だろうと思いつつながら自転車を先に進めました。

朝日を浴び、反射で白っぽく光る道の真ん中に何か黒っぽい物が置いてあるのが見えませんでした。

何だろうと、目をこらしながら自転車の速度を落としてその脇まで行ってみると、カラスでした。

お腹を天に向け、体の真ん中で両脚が縮こまっていました。

死骸でした。

そうだと分った瞬間、一瞬ドキッとしました。

カーカー大声で鳴いていたのは、それを悲しんので、恐らく番い（つがい）だったのでしょう。

犬が死んだのを見たことはありません。飼っていた愛犬が亡くなったときに。

猫もあります。道路で車にひかれて「ぺしゃんこ」になったのを。

雀もありました。子供の頃、空から子雀が落ちてきたのを拾って、弟と二人で看病したのですが、翌朝には目が灰色になって死んでしまったのを。

しかしカラスは「生まれて初めて」でした。

獯猛且つ狡猾なカラス。

無意識にも「不死」だと思っていた、そのカラスが死んでいる。

しかも、密かに隠れることなく、生き物の死に方の作法に反し、おおっぴらに「人間の眼前」で。

そういつたつかの間の慌ただしい比較対照算段がよぎった後、ある言葉が脳裏をよぎりました。

「異変」

尋常ただならぬ事態、の到来。

自転車の進行方向、照り輝く朝日の中にカラスの「真っ黒」

その残像が蘇ると、

未来に対して何か言いようのない不吉さを感じ、自転車を漕ぎながら、沖合彼方で急速に立ち上がり、あっという間に何もかも飲み込んでしまう津波のような「不安」に、気分ごと押し流されてしまい、しばらく自転車を漕ぐ先の景色が目に入っていませんでした。

それが、危ない運転だと気づいたのは、家にたどり着いてから後のことでした。